

エッセイ「私が手術室で出逢った看護師さん」（一般の部）

最優秀賞受賞作

手

青山 智美

下腹部のしこりは、無くなればとの期待とは裏腹に着実に大きくなっていった。町医者を受診するまで一ヶ月。すぐに大学病院を紹介され手術するまで一ヶ月。年末年始をはさんでのこと。年末に帰省した息子達に病気の説明をするという一年の締めくくりとなった。まさか自分が・・・よく聞く話だ。手術が終われば、子宮も卵巣もなくなるのだ。想像できない。

手術室の前室で夫や息子達に「じゃあね」と多分ニッコリと別れたはずなのに。手術室に入ってみると帝王切開で息子達を産んだ喜びの場所とは違った。彼らが生をうけた臓器をとりに来たのだ。全てが冷たく感じられた。家族に心配をかけまいと押し殺していた感情が出てきたのか。

怖い 横になり背中を丸めて全身麻酔の準備に入る。

癌になっちゃった 怖い 助けて

思わずそばの看護師さんの手を握った。

強く握り返されたわけでも色々と言われたわけでもない。ゆっくりとした穏やかな口調と大きな手。いや違う。柔らかく包み込まれたように感じた手。不安で冷たくなった私自身に寄り添ってもらったような手だった。

ふんわりと ふんわりと あたたかく

心が落ち着いていくのがわかる。

あれから半年。仕事もしている。側から見れば変わらない姿。二人に一人は癌になる時代とはいえ確率なんて当事者になれば関係ない。病気に向き合う現実がそこにあるだけ。だって自分自身のことだから。

ふと不安になる時、何故かいつもあの手を思い出す。

ふんわりと ふんわりと あたたかく

側で私の手を心を包んでくれる。あの手が大丈夫と言ってくれる。一人じゃないと。

きっとこれからも忘れることはない。支えてもらってありがとう。

素敵な手の、名前も顔もわからない看護師さん。

（選評）手術看護の本質が語られている作品です。同じ患者さんでも、受ける手術によって真逆になってしまう手術室の印象、孤独を感じた時の看護師の手の温もりなど、具体的な描写にその場の景色が思い浮かびました。

多くの患者さんは、手術室看護師のことは覚えていないので、手を握るというタッチングで、これだけの影響があることが上手に表現されています。強い不安の中にいる患者さんにとって、すぐそばにいる手術室看護師が、暖かく大きな存在となり、患者さんを支えている情景が思い浮かんできました。

また、最後の一文がグッと心に響きました。

エッセイ「私が手術室で出逢った看護師さん」（一般の部）

優秀賞受賞作 心も体も救ってくれた看護師さんが気付かせてくれたこと

村上 高子

突然の入院そして、手術。まさに青天の霹靂でした。

長年の持病が再発し、今回もいつも通り薬でしのげるだろう、と呑気に考えて訪れた病院で「もう体が限界です！手術して根本から治しましょう！」と先生に宣言されたのです。そのまま緊急入院となりましたが、突然過ぎて気持ちがまったく追い付かず、そして手術がどんなものなのかもわからず、ただ不安に苛まされていました。

手術の2日前、1人の看護師さんが病室に来てくださいました。「手術室の看護師のAです。よろしくをお願いします」そうご挨拶をされるAさんは、ほわっとした柔らかな雰囲気。手術室の看護師といえば、ドラマで見るような、キリっとした「超デキる」系のイメージだったので(すみません)、真逆の優しい佇まいにちょっと驚きました。

たくさんの書類をひとつひとつ丁寧に説明してくださって、パニックになっていた私の思考は少しずつ整理されていきました。

「不安だと思いますが、全身麻酔すれば、もう後は目が覚めたらすべて終わっているから安心して臨んで大丈夫ですよ」

説明をすべて聞き終えた時には、私の心も穏やかに凪いでいました。

Aさんの説明通り、麻酔を打ってから目が覚めるまでは、ほんの一瞬のような出来事で、体感的には1秒くらいにも思えました。

もちろんそんなわけもなく約2時間の手術だったわけですが、目覚めた時にはもう、私の回りにいるのはICUの看護師さんたちでした。

そこで今さら気付いたのですが、手術室の看護師さんたちは、私たち患者が深く眠っている間にこそ、その仕事を遂行してくださっています。

つまり、手術中の患者からは存在を感じることができません。

でもだからこそ、手術前の患者の不安を取り除くことに、ご尽力してくださるのでしょう。健康な時は意識したこともなかった「手術室の看護師さん」に、心も体も救われた…そんな気付きのあった約20日間の入院生活でした。

(選評) 日頃行っている手術看護の言語化につながるエピソードであると思います。そして看護が、患者さんにとって、どのような影響があるのかを考えさせられました。また、手術を受ける患者さんへの看護師の対応がよく解り、患者さんの不安な様子も理解できました。手術室での行為が具体的に描写されていることで、一般の方にもイメージしやすく、共感されることと思います。

エッセイ「私が手術室で出逢った看護師さん」（一般の部）

優秀賞受賞作

不安が消えた

飯塚 正人

もともと病気がちな身で何度も入院を繰り返し、手術も3回しています。

大学生の頃親元を離れ、都内のアパートで独り暮らしをしておりました。ある日、肛門周囲に違和感があり、その後急速に脹れてくるようなイメージを覚えました。小便をするのにも括約筋を使うということ、身をもって感じ、一晩激痛に耐えていましたが、翌朝ついに限界を迎えました。その頃はまともに歩くこともできない位に痛みが強く、タクシーで病院へ向かいました。診察の結果、肛門周囲膿瘍と診断され、緊急に手術が必要とのことでした。腫瘍が500円玉大まで大きくなっていたらしく、このサイズだと下半身麻酔での手術になると伝えられ、どんどん不安が募っていきました。

2時間後には手術の台に上り、お医者さんの指示に従い、横を向き、海老の様にグーッと丸まり、麻酔の針が刺さりました。その後すぐに下半身の感覚がなくなり、手術室の皆さんに体を支えてもらいました。動かず、感覚もない下半身はとても重く感じたのを覚えています。意識が有るので気を遣ってもらったのか、手術室の看護師さんとの他愛もない会話が、より一層の安心感に繋がりました。途中、あまりにも緊張したせいか、血圧が下がり、意識がボーとした時もありましたが、手術室の看護師さんの細やかな声掛け、逐一の状況説明のおかげで、不安にならずに手術を終える事ができました。思えば、入室前にも「この先生、上手ですから安心してくださいね。」という言葉により、非常にリラックスできたと覚えております。何しろ、痛みとも闘いながら未知の体験（手術）な訳ですから、本当に不安でした。

医療従事者の方々にとっては、毎日こなしている作業の一つかもしれませんが、患者一人一人にとっては一生に一度か、ましてや初めてかも知れない経験です。しっかりと患者の目線に立って、寄り添った看護に病棟の看護師さんとはまた違った、手術室看護師さんの素晴らしさ、重要性を感じました。

（選評）痛みとの闘いの描写、すぐに手術といわれた時の不安や恐怖、そして感覚的に覚えている手術室での処置がリアルに伝わってきました。

最高潮の緊張の中での“他愛もない会話”（本当は不安の軽減のために意図的に関わっていると考えますが）が患者さんに大きな影響を与えていることがよくわかり、自分たちが行っている看護に自信を持つことができる作品です。